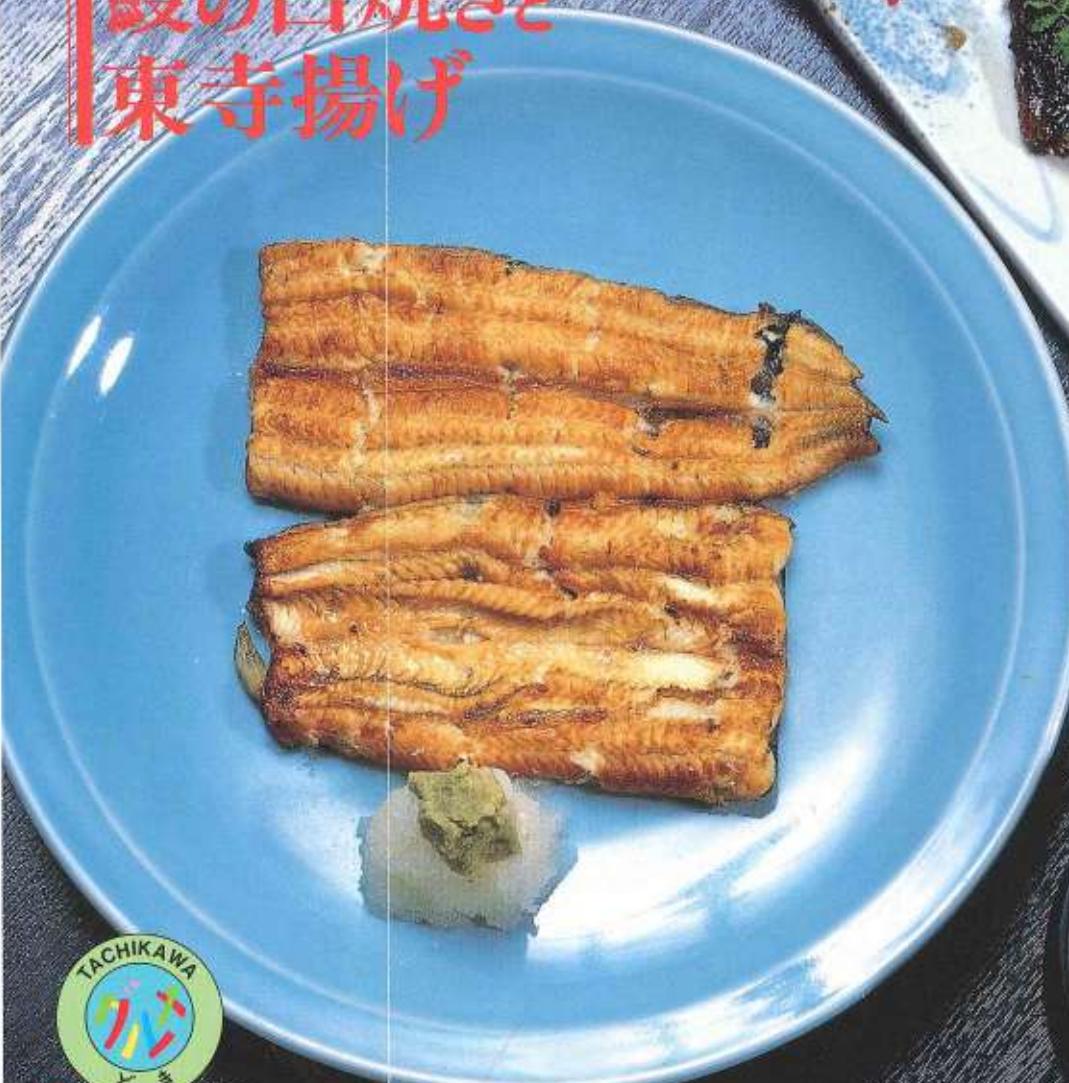
月刊
立川と語ろう　立川に生きよう
えくてびあん
8
(EKUTEBIAN VOL.13 AUGUST 1994 EKUTEBIAN)
⊙創刊10周年記念号⊙
記念別冊
『われら立川人』
刊行
まいあーと■サイエンスイラスト「クヌギの樹液に

石川達也の鰻の白焼きと東寺揚げ

石川達也さん。「二代目・万太郎」（曙町2丁目）の"大将"。厳父の経営する初代の「万太郎」は同じ曙町で昭和52年に開店。達也氏もまた日本料理の道を志すが、親戚に料理店が多く、身内で十分に修業を積むことが出来たという。平成元年、憧れの店を持つことが出来た、そして「二代目・万太郎」のユニークな命名。日本料理の味のキメテは、材料にあるといわれるが、達也氏のモットーは天然ものの鮮度を常に大切にしてゆくこと。いまどきで云えば、おこぜ、こち、すずきなど皆天然ものの鮮度が売り物。今回の鰻を使った「白焼き」はわさびと大根おろしで食べさせ、「東寺揚げ」は鰻の蒲焼きを平湯葉で巻いて揚げた料理。日本料理の伝統の型を見事にこなした逸品と言えよう。

撮影：板橋一明

TACHIKAWA グルメどき

創刊10周年記念別冊

十年一日と云いますが、十年を語るには十年かかることを知りました。小誌が創刊されてわずかな歳月なのに、編集をしていると語っても語っても尽きることがないのです。汲めども尽きない泉のような街と出逢えたのは、天の恵みとしか思えません。ありがとうございました。今夜、全ての編集が終わり、8月6日の刷上がりを待つばかりです。

人形作品：さとうその子「あの時の音」／題字：高橋 宏

立川当世旋律模様

この街には「歴史」にふさわしい音がある。写真家が捉えた独特のタチカワ・サウンド。

家族の肖像

栄町にユニークな家族を発見！何かが新しく、どこか懐かしい、たちかわ家族ストーリー

乙女ごころと色彩硝子

立てばシャクヤク、座ればボタン 作るアートはステンド・グラス？

ネイチャーフォトス

４人の写真家。技術を超えて語りかけてくる天然の世界。

童心、街を描く

一致団結！　立川二中・若葉のみんなが作り上げた砂絵の世界「僕らの作品を見てください！」

たちかわ文藝館

立川文人の総書き下ろし！本誌でしか読めない、珠玉の作品群

嗚呼、あの方がいてくださったら

この十年、大きな命を立川は失いました。ご功績に唯、感謝

マラソン対談「されど十年」

地図もなく道もない、出発の日から前後不覚の十年でした。

『われら立川人』御希望の方は

月刊えくてびあん創刊十周年記念別冊「われら立川人」を希望される方は、住所、氏名を記入の上、切手270円分を同封して、編集部まで御申し込み下さい。
〒190 立川市曙町2-17-5　杉田ビル　　えくてびあん編集工房

「あの悲しみをくり返さない」山中坂犠牲者の五十回忌

立川トピックス

昭和20年4月、立川を襲った大空襲。富士見町の「山中坂防空壕」では42名もの犠牲者を生んだ。五十回忌にあたる今年、市民合唱団「コーラス鳩の うた」が記念文集を発行した。同グループは五年前から「四十二人の犠牲者を偲ぶ集い」を開催しているが、文集にはこれまでの集いで語られた当時を知る人の体験談や犠牲者全員の名簿の他に、同グループが結成時から歌い続けている『山中坂悲歌』の楽譜も載せられている。「あの悲しみをくり返さない」という誓いの言葉が心に残るこの歌を、団長の永元須磨子さん（若葉町）は「子供たちにも歌い継いでいきたい」と語っている。

ERC、またまた優勝

七月三日、第十回全国小学生陸上競技交流大会、都大会予選において、エリート・ランナーズ・クラブ（ERC・若葉町）が、またまた、優勝を手にした。八月に行われる全国大会に東京都代表として出場する。その活躍ぶりは立川人展、本誌でもお馴染みでありますが、今年は東京都リレーカーニバル、東京都陸上選手権、そして、今回の交流大会と、負け知らずの連勝。個人でも高橋志穂さんは百米で優勝、小島綾子さんも4位、山内有紀恵さんも5位と決勝出場選手を3人かかえての輪臨場とあって今年は特に期待がかかる。個人への信頼が何より勝因のようだ。

真如苑だより

陽が沈む時間がのびて子供たちのはしゃぐ声も夕飯時まで聞こえてきます。

これからの季節、暑さに負けてしまいがちですが、夏休み中、真夏の日差しと元気に付き合いましょう。

それでも、暑さに疲れてしまったら、ちょっと一息身体も心も涼みにいらっしゃいませんか。

●

■日時　8月15日(月)
　3時～5時

■御本尊、真如宝物館をはじめとして映画など盛りだくさんの用意がしてございます。

■お申し込みは「えくてびあん・コンパニオン」（本誌を手渡してくれた人）へ。

動きつづける街 ここは立川

別冊『われら立川人』の中で「されど十年」と題した対談を行っていますが、裏をかえせば「たかが十年」です。立川と言う街は、10年や20年といった短いタームで語れるほど、底の浅い街ではないということを、えくてびあんは10年をかけて学んできました。釣ってしまえば底が見えてしまう「釣堀」ではなく、ゆるやかな流れの中に新しい命育む、まるで「大多摩川」のような街。そして、動きつづける街、立川。未来を見る目を、いつも持ち続けていくことを教えてくれたのが「立川」でした。

立井啓介　本誌ろうとる編集人

小林康史　本誌かけだし記者

小林　十周年記念別冊『われら立川人』も完成して、えくてびあんもひとつの節目を迎えさせていただきました。

立井　この間、実に大勢の「立川の宝」ともいうべき方々にお会いできたおかげで、とても勢いのある十年を過ごさせていただけたね。だけど過去の思い出にひたってばかりではしょうがない。ここではこれからのえくてびあんについて話をしようじゃないか。

小林　そうですね。僕なんかはまだまだ新米で、とりあえず毎日が精一杯といった感じなんですが、なんとなく気づいたのは、「自分の浅い経験や知識だけでものを考えたり、語ったりしてはいけないな」ということなんです。だから十年の土台に乗っかっているだけじゃなく、今まで以上に街を知って、たくさんの人と話をしていきたいなと思うんです。

立井　そうだね、それは僕たちのような活動をしているものには、全てにおいて言えることなんじゃないかな。過去の結果の上にあぐらをかいて、毎月のルーティン・ワークをただこなしているだけでは、低迷していくのは目に見えているからね。

小林　自分たちの過去の経験にばかり頼っていちゃいけませんね。

立井　そう。例えばこの十年でえくてびあんが出会ってきた「立川人」の数が、二十年後は、単純に現在の二倍になっているかというと、必ずしもそうは言えないと思うんだ。『われら立川 [illegible] けれど立川は釣堀のような、釣ってしまったら何も残らない街ではない。流れはとまることなく、新しい命がどんどん生まれる、まるで「大多摩川」のような街だということを、忘れてはいけないんじゃないかな。

小林　街が「動いている」ということでしょうか。

立井　そう。えくてびあんはそんなふうに街を見続けていきたいと思うんだよ。例えば「アミューたちかわ」をポイントにして立川市の文化振興に励んでいる「立川市地域文化振興財団」の活動も、街を動かし続けている大きな力なんじゃないかな。コンサートやイベントを通して立川の街を活気づけている。ある意味では、僕たちえくてびあんにとって「同志」といった存在だと思うよ。

小林　そういえば文化振興財団が発行している広報誌「ザ・ムーサたちかわ」の七月号に、『われら立川人』にも素敵な小説を書き下ろしてくださった、森忠明さんのお話が掲載されてますね。

立井　とても興味深いお話をされているね。森さんにとっての立川という街は、故郷であると同時に、現在の作品の「第一級資料」でもある、といったお話には、思わずナルホドとうなづいてしまうし、創作のエネルギーを生み出す力がこの街にはあるんだということを、教えてくださってるような気がするね。

小林　立川のイメージを「清濁併せ呑む街」としたうえで、融通性に富んでいるのが立川の人情だと話されているのも、とてもわかりやすいですよね。

立井　そしてこれからの立川について、よい意味での「無方性」で、どんな人でも寛容に受け入れ包み込んでくれる「自由都市」になれば、といった考え方を提示されている。

小林　森さんの立川を見つめる視線のように、これからのえくてびあんも、動きつづける立川を見つめる目を、常に持ち続けていきたいですね。

立井　そして創刊二十年には、もっと立川に根づいた「えくてびあん」であ [illegible]

ことわざ問答 53

漢字一字挿入せよ

風を借り□を使う

蚊が□を咬む

えくてびあんの輪

人がゐて、街があります。
あなたがゐて、立川があります。
そこにちょっとだけ、えくてびあん！
リストのお店にはいつでも えくてびあん！

七夕さま

脳死問題研究家　下田 靖雄

毎年、夏になると夜空には、天頂を流れる天の川を挟んで、青白い一等星「織女」と対岸の淡黄色の一等星「牽牛」が輝く。この両星は世界各国にいろいろな伝説があるが、日本では中国の唐から伝来したといわれるように、古く万葉の歌人、山の上億良などの歌が残っている。

年に一度、七夕の日に両星は川を渡り、暫しの逢瀬を楽しむと語り継がれてきた。旧暦の七夕の夜、「北の大十字星」を形作る白鳥座の主星「デネブ」がカササギとなって、天の川に翼を並べて織女を背中に乗せて牽牛のもとに渡らせるという。愛の物語である。

日本では地方にもよるがこの日、子供達は不得意な勉強の学科が克服出来るようにと、願いを短冊に書いて笹の小枝に結び付けて川へ流す習慣がある。

この星には思い出がある。昭和三十年頃、私は工業技術院の研究所から三鷹市にあった民間会社へ招聘され入社した。この会社では朝礼があり、全員が役員の「今日の話題」を聞き、ラジオ体操を終えて、各自が仕事に取りかかる。

ある夏の朝、例によって一人の東大出の重役が一段高くなった演壇があがり口を開いた。

「今日は七夕の日です。年に一度この日、織女が天の川を渡って対岸の牽牛に逢いに行きます。皆さん、今夜は、その美しい光景をぜひご覧なさい」と言った。

私は子供の頃からの天文ファンなので、こんな社会的に立派な役員が、間違った知識しかないのかと、首を傾げた。朝礼後の職場へ向かう途中、その役員の後を追って囁いた。

「あれは間違いです。織女と牽牛は恒星で、その位置を移動することはないのです」

一瞬、その役員は頬を染めて「そうなのか」と呟き、私の顔を見ずに役員室に消えた。その後ろ姿は、日頃の威厳が失われていた。

職場へ戻った私は、自分の言った言葉を後悔した。つまらぬ訂正をするのではなかった。せっかく彼と社員が「夢」をもてたのだから、余計なことを言わなかった方が良かったのでないか。普段、家族と夜空など見る余裕もない時代である。せめて、この一夜、子供達と「ロマン」の夢を抱けただろうに、無粋なことをしたと、ほろ苦い感じを味わったのである。

毎年、七夕が近ずくと、あのときの事を思い出す。

もう東京には星はない。子供達も七夕様は童謡と絵本の上でしか知らない。だから、プラネタリュームなどで星空の投影を見て驚く。ほんとにこんなに沢山の星が見えるのか、と。

世の中が騒々しくなり、光害も多くロマンなどかけらもない生活しかできない。いつとはなく人の心も、涸れている。東京では、科学知識よりも情緒が必要だったと思ったのである。

表紙は語る

まい あーと サイエンスイラスト『クヌギの樹液に集まる虫』by 中西 章

今月はサイエンスイラストレーターの中西章さん（若葉町）の作品です。

「描かないと見えてこない形や色彩、美しさがあることを子どもたちに伝えてみたいですね」と中西さんは昨年の夏、幸公民館で昆虫細密画教室を開催し、好評を博した。また、夏休みの間、同ホールにて今までの作品の数々を展示した。中西さんの手に掛かると、いろいろな昆虫たちが生命の光を帯びた切実な生き物として、映り、今にも動き出すようで鮮やかだ。

例えば、ゴキブリと言えば、グロテスクなイメージであるが、生態がまさに精緻と言えるほどに描かれているためか、ファンタジーを感じるように、きれいに見えるのだ。写真よりも特徴を強調することができ、細かい部分が見えやすいことから、一枚のイラストは百行の説明に匹敵するようだ。リアリティーこそは生物画の生命。今 [illegible] ら描き続け、もう四十年、図鑑・学術雑誌に昆虫や植物の絵を描き続けている。サイエンス・イラストレーターの第一人者として、忙しい毎日だ。

立川クイズ

立川に最初の映画館の灯がともった大正14年の中元大売出しに、立川で初めてのチンドン屋による宣伝がお目見えしました。一人のチンドン屋が、街の辻々で「トザイ、トーザイ」と口上を述べて宣伝をしたのです。その賑やかな鐘や太鼓の音に大勢の人々が集まりました。

当時、このような宣伝マンには、「チンドン屋」という名称がついていなかったのです。では、この宣伝を企画した北口大通商店会では、何と呼んでいたのでしょうか。

① チンチンドンドン
② 東西屋
③ 宣伝マン

【7月号の答】❷

立川市の標高差は約60メートル。奥多摩街道沿いの「はけ」で高低差を実感できるものの、ふだんの生活ではその差を意識することはありません。現在、昭和記念公園内につくられた人工の山が、立川市の標高では一番高いことになっています。

東風

先月号で工房に古時計が入り、その時報の音色の透明さ、おおらかさを書いたところ、俳人・深谷鬼一さんから「えくてびあん時報涼しき古土圭」の一句を頂戴した。あんなにだらだら書いた散文よりも、この一句が持つ詩の韻律に叶わない◆それにしても時計とせずに、「土圭」と表記したのは俳人好みのあて字かと合点したが、いや待てよと漢和辞典をめくってみると、土圭、あるではないか。日影を測る器。いい言葉だなあ◆土圭にちなんで云うと、工房にレコードプレイヤーがある。プレイヤーの前は「蓄音機」と呼んでいた代物である。昨今はコンパクトディスク全盛で、理屈はよくわからないが、LPと呼ばれる盤よりも遥かに「いい音」がでるのだそうである。それでも「少し旧い」ものを好む工房員趣味は、コンパクトディスクをほとんど聴かない。そこで、レコード盤だが、入手が難しい昨今のこととて、各自が持ち寄ってくるので、どうしても「少し旧い」歌が圧倒的に多い。ニーナ・シモンのオウル、ルーヴィン・ブラザースのウエスタン、ジャック・ブレルのシャンソン。先般、亡くなったバッキー白片とアロハ・ハワイアンズなど格好の一枚である◆最近、一部でLPレコード復活の気配があると聞く。世の中「工房員趣味」が蔓延してきたのであろうか◆敗戦日　麦飯を盛る　えくてびあん

ことわざ問答 答

蚊が牛を咬む

風を借り船を使う

月刊えくてびあん 第121号
平成六年八月一日発行
発行所 えくてびあん編集工房
東京都立川市曙町2-17-5
杉田ビル6F 〒190
電話 ○四二五（28）○○八二
FAX ○四二五（28）一二九七
編集発行人 立井啓介
印刷所 ㈱大廣社

（編集）池田隆男 片山統久 小林康史 隅川 理 名尾雨真 中村絵里 岩井正弘 町田健一 山田恵子
（写真）天野武男 板橋一明 井上義治 スタジオ269 枝川一巳 山崎健一

山崎健一の
AT PARKS……
心地よい風。木もれ日。子供たちの遊び声。今日は公園と話そう。
第8回 立川公園と花菖蒲園
真夏の厳しい日差しが菖蒲の葉を撫でるようにかけ抜けて行った。緑の木陰では、差し込む光が柔らかい。
ゲートボール場も市民体育館のプールも夏の声が響く。